

【原文】

上古文失之、①中古文得之、中古文失之、②下古文得之。以類相從、因以相補、共成一善辭矣。行、或上古人失之、中古人得之、中古人失之、下古人得之。以類相從、以類相補、③共成一善辭矣。行、或上失之、而下得之、或下失之、而上得之、或上下失之、中得之、或中失之、上下得之。或天神文失之、反聖人得之、或聖人失之、④反賢人得之、賢者又失之、⑤而庶民反得之、庶民又失之、⑥反夷狄得之。⑦或內失之、反外得之、外失之、⑧反內得之。會有得之者、會有失之者。⑨故上下、外內、尊卑遠近、俱取其文・要語、⑩而集其長短、以類相從、因以相補、則「且」〈俱〉矣。⑪然後文書辭言通具也。⑫

【校勘】

- ①「抄」「上古文失之」  
「經」「行、或上古文失之」
- ②「抄」「中古文失之」  
「經」「或中古文失之」
- ③「抄」「或天神文失之、反聖文得之、或聖文失之」  
「經」「或天神文失之、反聖文得之、或聖文失之」
- ④「抄」「反賢者文得之、或賢者文失之」  
「經」「反賢者文得之、或賢者文失之」
- ⑤「抄」「而百姓文得之、百姓文失之」  
「經」「而百姓文得之、百姓文失之」
- ⑥「抄」「而夷狄得之」  
「經」「而夷狄得之」
- ⑦「抄」「或外失之」  
「經」「或外失之」
- ⑧「抄」「會有失之者、會有得之也」  
「經」「會有失之者、會有得之也」
- ⑨「抄」「其文要語」  
「經」「其文與要語」
- ⑩「抄」「則且矣」  
「經」「則俱矣」
- ⑪「抄」「然後文書及辭言臺都通具也」  
「經」「然後文書及辭言一都通具也」

【訳】

上古の文が欠けたのを中古の文が得て、中古の文が欠けたのを下古の文が得る。(同じ)種類のもので互いについて補完し合って一緒に一つの良い文を成す。そうだ、あるいは上古の人々が落としたものを中古の人々が得て、中古の人々が落としたものを下古の人々が得る。(同じ)種類のもので互いに従い、(同じ)種類のもので互いに補完して一緒に一つの良い文を成す。そうだ、あるいは目上の人が落としたものを目下の人が得て、あるいは目下の人が落としたものを目上の人が得て、あるいは目上の人と目下の人が落としたものを真ん中の人 が得て、あるいは真ん中の人 が落としたものを目上と目下が得る。あるいは、天神の文が欠けたことをかえって聖人が得て、あるいは聖人が欠けたことをかえって賢人が得て、賢者がまた欠けたことを庶民がかえって得て、庶民がまた欠けたことをかえって夷狄が得る。あるいは、中から落としたものをかえって外から得て、外から落としたものをかえって中から得る。場合によってはたまに得るものもあれば、場合によってはたまに落とすものもある。したがって、上から下、中から外、尊いものから卑いもの、遠いところから近いところに至るまで、すべてがその文書と要語を得てその長所と短所を集めて、(同じ)種類のもので互いに従って互いに補完し合えば、全て揃うことになる。その後、文書と言葉はすべて備わる。

【注釋】

○古文

『太平經合校卷50』諸樂古文是非訣：“古文眾多、不可勝書。”

○以類相從

『荀子・正論』：“故象刑殆非生於治古、並起於亂今也。治古不然、凡爵列、官職、賞慶、刑罰皆報也、以類相從者也。”

『太平經合校卷50』去邪文飛明古訣：“積文以類相從、使眾賢聚之、撰其中十十相應。”

○因以相補

『太平經合校卷11』：“故天地之性、下亦革諫其上、上亦革諫其下、各有所長短、因以相補

然後天道凡萬事、各得其所。”

○善辭

『公羊傳莊公八年』：“還者何？善辭也、此滅同姓、何善爾病之也。”

【原文】

天地出生凡事、人民聖賢跂行萬物之屬、各有短長、各有不及、<sup>⑬</sup>各有所失。故所爲各異、大率俱欲得天地之心、而自安也。<sup>⑭</sup>故今天遣吾下、爲上德君更考文、教吾都集合之。<sup>⑮</sup>神文・聖賢辭、<sup>⑯</sup>下及庶人奴婢夷狄、以類相從、合其辭語、善者以爲洞經、<sup>⑰</sup>名爲皇天洞極政事之

文也。然後天地病、一悉除去也。⑱

【校勘】

- ⑬ 『抄』「各有所不及」  
『經』「各有所不及」
- ⑭ 『抄』「故所爲所作各異不同其大率要俱欲樂得天地之心而自安也」  
『經』「故所爲所作各異不同其大率要俱欲樂得天地之心而自安也」
- ⑮ 『抄』「爲上德道君更考文、教吾都集合之」  
『經』「爲上德道君更考文、教吾都集合之」
- ⑯ 『抄』「從神文聖賢辭」  
『經』「從神文聖賢辭」
- ⑰ 『抄』「合其辭語善者以爲洞極之經」  
『經』「合其辭語善者以爲洞極之經」
- ⑱ 『抄』「迺後天地病壹悉除去也」  
『經』「乃後天地病一悉除去也」

【訳】

天地はすべてのことを生み出すので、人民と聖賢、動物・萬物の群れは、それぞれ長所と短所があり、それぞれ到達できないことがあり、それぞれ落とすもの過失がある。したがって、為すことはそれぞれ異なるが、概してすべて、天地の心を得て、おのずから樂にしようとする安樂であろうとする。したがって、今天が私を下に送ったのは、上徳の君主のために再び文を調べ、私にそれをすべて総合させようとするのだ。神の文と聖賢の言は、下は庶民・奴婢・夷狄にまで及び（同じ）種類のもので、互いに従ってそれらの言葉を合わせ、よいものを「洞経」とし、「皇天洞極政事の文」と名付けるものである。そうした後に、天地の病がは一気にすべて除去されるのである。

【注釋】

○天地之心  
『禮記』禮運「故人者、天地之心也、五行之端也、食味・別聲、被色而生者也」。

○天遣吾下  
『太平經合校』卷50「故天遣吾下者、革其行、除其責、而不章更、天地人且共治之、使神病災之也」。

【原文】

請問合衆類以相從。然、善正其言則吉、⑲不善正其言則凶。然後太平上皇之氣立來矣。夫人

有病、皆願速較爲善、天地之病、亦願速較爲善矣。夫邪文亂道經書、<sup>②①</sup>道經亂、則天文地理亂矣。天文地理亂、則天地病矣。故使三光風雨四時五行、戰鬪無常、歲爲其凶。<sup>②②</sup>帝王爲愁苦、縣官亂理、<sup>②③</sup>民愁苦飢寒、<sup>②④</sup>此爲邪文所病矣。<sup>②⑤</sup>夫邪文邪言誤辭以理國也、<sup>②⑥</sup>日日得亂、於是臣爲枉法而妄爲、民爲之困窮、共汙天地之理亂。天官大怒、哭泣呼冤、不絕矣。<sup>②⑦</sup>邪言邪文誤辭、以理家也、<sup>②⑧</sup>則父子夫婦亂、更相憎惡、而常鬪辯不絕、遂爲凶家矣。夫正言正文正辭、乃是正天地之根、而安國家寶器父母也、<sup>②⑨</sup>而天下凡人萬物所受命也、故當力正之也。

【校勘】

- ①⑨ 『抄』「然善正其言則吉」  
『經』「然善正其言則吉」
- ②⑩ 『抄』「夫邪言邪文以說經道也、則亂道經書」  
『經』「夫邪言邪文以說經道也、則亂道經書」
- ③⑪ 『抄』「歲爲其凶年」  
『經』「歲爲其凶年」
- ④⑫ 『抄』「縣官亂治」  
『經』「縣官亂治」
- ⑤⑬ 『抄』「民愁恚飢寒」  
『經』「民愁恚飢寒」
- ⑥⑭ 『抄』「此非邪文邪言所病邪」  
『經』「此非邪文邪言所病邪」
- ⑦⑮ 『抄』「夫邪文邪言誤辭以治國也」  
『經』「夫邪文邪言誤辭以治國也」
- ⑧⑯ 『抄』「日日得亂於是邪言邪辭誤文爲耳所共欺、則國爲之亂危、臣爲之枉法而妄爲、民爲之困窮、共汙天地之治亂、天官大怒、日教不絕也、人哭泣呼冤、亦不絕矣」  
『經』「日日得亂於是邪言邪辭誤文爲耳所共欺、則國爲之亂危、臣爲之枉法而妄爲、民爲之困窮、共汙天地之治亂、天官大怒、日教不絕也、人哭泣呼冤、亦不絕也」
- ⑨⑰ 『抄』「邪言邪文誤辭以治家也」  
『經』「邪言邪文誤辭以治家也」
- ⑩⑱ 『抄』「夫正言正文正辭、迺是正天地之根、而安國家之寶器父母也」  
『經』「夫正言正文正辭、迺是正天地之根、而安國家之寶器父母也」

【訳】

「すべての種類を集めて互いに従わせる」ことについて尋ねます。そうだ、その言葉を善く正しくすれば、吉とし、その言葉を善く正さなければ、凶とする。その後、「太平上皇」の氣がすぐにやって来るのである。そもそも人が病気になるれば、皆早く良くなることを願い、天地の病氣もまた早く治ることを願う。そもそも邪悪な文は道と經書を混乱させるので、

道と経が混乱すれば、まもなく天文地理は混乱する。天文地理が混乱すると天地は病む。したがって、三光(太陽、月、星)と風雨、四時、五行が混乱し、恒常性をなくしてしまうと、みのは凶となる。帝王はそのために心苦しむ、縣官は政治ができなくなり、人々は飢えと寒さを心配で苦しむ。これが邪悪な文が病ませることである。

邪悪な文章と邪悪な言葉と誤った論説で国家を治めれば、日に日に国は混乱する。これに臣下は法を歪曲し、妄りに行動し、民はそのため困窮するので、皆天地が乱を治める道理を汚すのだ。それによって天官が大いに怒り、泣きながら悔しがることもまた絶えなくなる。邪悪な言葉と邪悪な文と誤った論説で家を治めることになれば、父子と夫婦の關係は乱れるようになり、また互いを憎悪し争いと弁論常に喧嘩が続き、結局凶家になる。つまり、正しい言葉と正しい文と正しい論説は、すなわち天地を正しくする根本であり、国家を安らかにする宝物であり親であり、天下のすべての人と万物が受けた召命であるから、それゆえに努力して(言葉と文を)正しくしなければならない。

【注釋】

○立來

『太平經合校卷105』：“然後太平上皇之氣立出延年立來天文聖人之辭尚迺有短長”

○速較

【原文】

故吾之爲道、悉守本戒中而棄末。<sup>②9</sup>天守本、故吾守本也。天戒中、故吾戒中也。

天棄末、故吾棄末也。吾之爲文也、乃與天地同身、同心同意、同方同理、同好同惡、同道同路、<sup>③0</sup>故令德君按用之、<sup>③1</sup>無一誤也。萬萬歲不可去、但有日彰明、<sup>③2</sup>無有冥冥時。<sup>③3</sup>但有日理、無有亂時。<sup>③4</sup>但有日善、無有惡時也。故號天之洞極正道、乃與天地心相抱。<sup>③5</sup>故得其上訣者可老壽、得其中訣者爲國輔、得下訣者、可常自安。<sup>③6</sup>

【校勘】

②9 『抄』「故吾之爲道悉守本而戒中而棄末」

『經』「故吾之爲道悉守本而戒中而棄末」

③0 『抄』「迺與天地同身同心同意同方同理同好同惡同道同路」

『經』「乃與天地同身同心同意同方同理同好同惡同道同路」

③1 『抄』「故令德君按用之」

『經』「故令德君案用之」

③2 『抄』「但有日章明」

『經』「但有日章明」

③3 『抄』「無有冥冥時也」

『經』「無有冥冥時也」

③4 『抄』「無有亂時也。」

『経』「無有亂時也。」

③5 『抄』「故號爲天之洞極正道、迺與天地心相抱。」

『経』「故號爲天之洞極正道、乃與天地心相抱。」

③6 『抄』「得其下訣者、可以常自安。」

『経』「得其下訣者、可以常自安。」

【訳】

したがって、私が道にすることは全て根本を守り、中途半端さを警戒して末端を捨てることだ。天は根本を守るから、私も根本を守る。天は真ん中を警戒するので、私も真ん中を警戒する。天は末端を捨てるので、私も末端を捨てる。私が文にすることは經文となすことは、すなわち天地とともに体を共にし、心を共にし、志を共にし、方向を共にし、理を共にし、好みを共にし、嫌悪を共にし、道を共にし、路を同じくすることである。だから有徳の君主に熟考して利用し、一つの誤りもないようにする。

(そうして) 長い間、取り去ることがなければ、ただ明るく耀く日びがあるのみで、くらしい時はない。ただ治まる日々があるのみで乱れる時はない。治まる日々があるのみで、乱れる時はない。したがって、天の「洞極正道」と呼ぶのである。すなわち天地の心とともに抱き合うことである。したがって、上訣を得た者は長生きすることができ、中訣を得た者は国家を保衛することができ、下訣を得た者は常に自ら安らかなることができる。

【注釋】

○相抱

『太平經合校』卷94「獨貴自然、形神相守。此兩者同相抱、其有奇思反為咎。」

○老壽

『左傳』昭公二十年「其所以蕃社老壽者、為信君使也」。

王明『太平經抄上冊』(中華書局、一九六〇年)、三五二五行目〜三六一十一行目  
楊寄林訳注『太平經中』(中華書局、二〇一三年)、一一九九〜一二二六